

未来のかたちを考える

～あなん未来シンポジウムより～

養老子孟司さん（大正大学客員教授）

「今、幸せに生きるという点で」



地方創生に向けて、本市では大正大学と連携し、「あなん未来会議」を創設しました。国際的、専門的な委員により斬新なまちづくりのアイデアを考えていきます。そのスタートイベントとして、昨年10月20日に文化会館で「あなん未来シンポジウム」を開催しました。養老子孟司先生の基調講演など当日の様様をダイジェストでお届けします。

自分で確かめ考えて、本質を見抜く必要がある

養老でございます。私、阿南は初めてではないんです。10年以上前から四国をずっと回っていて、阿南にも来ていますが、地元の方と一言も口をきいたことがありません。なぜなら虫ばかり捕っていたからです（笑）。

実は、四国は西と東で虫の種類が微妙に違います。吉野川が最初は北に流れ、途中から急に東へ曲がっているのは、四国が東西に一度割れてもつ一度くっついたんです。虫を調べれば分かるんです。

私は1937年生まれで、小学2年生の時、終戦を迎えました。先生の指示に従い、それまで使っていた国語の教科書の指定された箇所を墨で塗りつぶしました。それ以来、新聞、テレビなどの情報も信用しなくなりました。

「横浜のマンションの杭が固い地面に届いていない」という事件も、なぜ、そのようなことが起こったの

か、明確な説明が無くよくわかりません。私が仮にこの仕事をしているとしたら、「何のために杭を打っているのか」と考えて、杭を固い地面まで届かせるようにするでしょう。物事は自分で確かめ考えて、本質を見抜く必要があります。

個性とは、自分の価値と仕事

国会は教育基本法さえ作れば教育がよくなると思っていますが、現実には教師や親は、「個性」とは「生まれつきあって、変わらないもの」という本質の意味もつまく説明することができていません。「自分の価値は個性、つまりほかの人と違うことに価値がある」ということを何となく教えるので、本当の自分とは違った価値があるはずだと思い、自分探しに出る若者やフリーターが増えたりしています。

私は30年間解剖の仕事をしました。が、解剖の仕事に合った人がいると思いますか？仕事は自分に合うというよりも、世の中の穴を埋めるよう

物事の本質を捉えて、壁を越えて挑戦する

に世のため人のために役立っていることが大事です。

一方的な情報、知識に惑わされてはいけない

今、日本の幼稚園の5割が、日本語も満足にしゃべれない幼稚園児に英語を教えています。I am a boy. という文章の中の、I は要らなうと思えます。なぜなら、I am. という動詞の主語は、I しかないからです。私は女房と話す時、「私が」と言いません。でも英語では必ず、主語を入れなくてはなりません。

外国には「紅茶にしますか、コーヒーにしますか」と聞いてくる習慣があります。紅茶かコーヒーか、選択肢があり、それをどちらかに決める「主体」がいます。私はこの「主体」の存在を押し付けられるのが気に入らません。

外国では3つくらいの子どもでも、親から誕生日祝いをもろう時、色を決めるのはお前だと選択肢を与え、「主体」を意識させられる文化ですが、日本人はそういう文化では育ってきていません。

文化が違うのですから、「あなたの文化では、I am a boy. というのでしようが、日本ではそんなことはわかりきっているのよ。I am a girl. I am a girl.」

「生きていくということ」も同様に、本質を考える必要がある

「情報」とは「時間がたつても変わらないもの」のことです。ニュースは毎日変わっていくように思えますが、そうではなく毎日増えているのです。だから情報過多と言っています。「情報」は消えませんが、「情報」とは変わらないものです。生きていくことはひたすら変わっていくことなので、同じものばかり扱うと面白くなくなってしまう。

「個性」を重視するということとは、「生まれつき持っている、死ぬまで変わらない」ものを大事にするという常識になります。教育とは子供を変えていくことです。個性中心になったときに教育は本来の意味で消えたことになります。

勇気をもって、壁を越えて挑戦することが重要だ

組織に入りたての若い人が課長に、来年の提案をした時、その結果予想ができれば無責任と言われます。従って、予想ができなくてはいけなくて思っている方がほとんどです。

しかし、予想のつかない範囲はあると思います。昔の人にすることは、そつと予想のつかない何かがあることは当たり前でした。壁があっ

て、そこからの世界は予想がつかないものです。その壁を一步越えらるる学問を教えていました。

私が通っていた中学、高校はカトリック系のイエズス会で、校長は30代のドイツ人でした。毎週、月曜日の朝礼で、下手な日本語でいつもしゃべっていた話の中で一つだけ覚えていたのが「勇気」という言葉です。特に男の子はきりきりのところを超えるって先が見えなくなりますが、見えない状況で一步踏み出すということ、昔の人は徳目としました。

生きそびれないように、後悔しないように生きてもじりたい

私の知り合いが経営するホスピスに、毎日死にたくないと言つ90歳すぎのおじいさんがいます。平家も滅びました。皆、死ななければいけないという事はわかっています。平家の時代の人は生まれて30歳かそこらで、見れるものは見えてきて、人生に悔いはないと言っています。

今90歳になつても死にたくないという事は、まだ生きたいということになります。それは、今まで生きてきてなかったということ。生きるのを先送りし、それを続けていくと90歳になつても、これからも生きなくてはと思つのではないのでしょうか。私は「生きそびれる」と言っているのですが、今は調べれば調べるといろいろなることがわかります。か、「生きそびれる」可能性が高くなります。皆さまには、生きそびれないように、後悔しないように生きてもらいたいと思います。





スポーツジャーナリスト
二宮清純さん

二宮清純…「スポーツを地方創生に生かす」
オリンピック追加種目候補のなかに、野球、ソフトボール、サーフィ

は楽しいことです。
「AWAががん対策募金」の出前講座では、高校生相手に私の体験談を話して、その後、大切な人へと手紙を書いてもらっています。こういった心は、患者の気持ちの支えになります。健康は自分のためだけでなく、家族、大切な人のためでもあります。

床桜英二…「全員参加で『あなんの宝』に磨きをかけ未来につなぐには？」
ひととおり、『あなんの宝』についてお話しいただきましたので、次に、地域が全員参加で、『あなんの宝』に磨きをかけ、次の世代につないでいくためにはどうすればいいかをお話したいと思っています。



あなんの宝を磨き上げて、次の世代へつなげていく

基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、「あなんの宝を未来へつなぐ」と題して、床桜英二さんほか4人の「あなん未来会議」の委員に、それぞれ分野から地方創生にかける熱い思いを語っていただきました。

床桜英二（コーディネーター）…「あなんの宝とは？」
本日のパネルディスカッションの題名は「あなんの宝を未来へつなぐ」ですが、まず「あなんの宝」についてそれぞれ語っていただきたいと思っています。

二宮清純…「野球に代表される地域主体のスポーツクラブとその施設」
阿南市はスポーツ施設も充実し、「野球のまち阿南」は県内に定着化しているようです。私は愛媛県出身で、プロ野球では本拠地が四国に近く四国出身の選手が多い阪急ブレーブスを応援していました。ヨーロッパのサッカーをはじめ、スポーツというのは地域の文化であり、地域間競争になっていきます。

昔は、高校野球でも、応援席では徳島県は阿波踊り、高知県は大漁旗で、甲子園に方言が飛びかうなど地域性がふんだんに出ていました。チームは目的を達成したら解散し



徳島文理大学総合政策学部教授
床桜英二さん

がありますが、正式種目になれば阿南市との関わり合いも出てくると思います。
仮に、IOCに認められなくても例えば、サーフィンの市場規模は大きく、世界では10年で3割増の3500万人、市場規模はアメリカだけで20億ドルもあります。徳島県や高知県、宮崎県などの過疎化、高齢化地域ではサーフィンが盛んなので、これを地方創生に利用する手もあると思います。

池添純子…「小さいころから地域に関わり、地域の人たちと協力する経験をつむ」
地域包括ケアという政策が進んでいます。誰もが高齢者になって、お世話する方、される方、どんな立場になるかわからないものの、やはり今の日本人は地域の中で最後まで生活したいという調査結果があります。この結果に関して、まちづくり全体で考えると、ある日突然役割が与えられて、じゃあ明日からやろうということではなく、スウェーデン、カナダのように子どもたちが小さいころから地域に関わり、地域の方たちと何かしら協力してきたという経験が必要になってくると思います。

勢井啓介…「安心できる医療設備と医療者のスキルの充実を図る」
12年前の病氣にもかかわらず、こ

ますが地域のクラブは解散しないわけ、これからは地域主体でクラブを作っていく必要があると思います。

池添純子…「歴史からひも解いて、新たな味わいを創出するまちづくり」
所属しています阿南高専創造技術工学科の建設コースで、阿南駅前商店街のまちづくりに関わっています。商店街の空き店舗の状況を調べ、400分の1の模型を作成し、大正時代の地図から歴史をひも解くなどしてまちづくりを学生と提案してきました。

現在、図面のない空き店舗の食堂を実測調査し、古い木が使われていて人の歴史を感じる、味わいが出ているなど、いいところを見つけ出し、「自分たちが使ったら」という計画を立案中です。このように、学生が地域に関わるということが重要です。

佐藤道明…「お接待文化の中で活躍するサテライトオフィスの展開」
加茂谷は山、川が素晴らしく、ここにサテライトオフィスを作りました。そして、皆が集まる場所という意味の、「屯（たむろ）」という名前を付けました。加茂谷には、おすそ分けなど「お接待」というものがあり、地域の方と交流が生まれています。

うやって今、元氣にお話しできるのも納得のいく治療を受けられたからだと思います。医療者の高いスキルと病院の最先端の医療設備があれば、病氣はそんなに怖いものではなくなくなってきています。

これからは、最新の医療設備とスキルの高い先生を有する医療センターが必要で、今ですと、治療支援ロボットも高額ですがあります。阿南にもこのような体制があればいいと思います。

佐藤道明…「あなんの宝ともいうべき自然環境を地方創生に生かす」
サーフィンの話に戻ると、自然環境を非常に大事にするパタゴニアというスポーツメーカーが、徳島大学の武知美波さんという阿南に住んでいるプロサーファー個人を応援して、彼女は阿南ふるさと大使としても活躍しています。

伊島にアイランドサテライトオフィスを作るとしたら、日本の東京



株式会社HAL代表取締役
佐藤道明さん



阿南工業高等専門学校 助教
池添純子さん

東京のオフィスでは、農家から直接譲ってもらった農産物で料理を作り昼食をとっているのですが、阿南でも、畑を借りて野菜を作って、昼食を食べたいと思っています。

勢井啓介…「病氣になっても、障害があっても人のためになる仕事ができる環境」
12年前、ステージ4のがんがわかり、家族にも悲しい思いをさせましたが、一方、友人たちからは温かい励ましで元氣をもらうことができました。

数年後にわかったことですが、神社にお祈りに行った妻が、私が死んだら、私たちの子どもの面倒を見なくてはいけないということで、自分の健康を祈ったということには感心しました。
それから毎年手術を受け、3回目の手術後は再発していませんが、病氣になっても、障害があっても人のためになる仕事ができるというの



AWAがん対策募金理事長
勢井啓介さん

のIT会社だけでなくアメリカとか海外の一流の人たちを呼ぶのがいいと思います。そういう人たちは、自然環境とか循環とか生物多様性に非常に関心があります。仕事をしながら伊島を世界に発信してもらえ、「世界の伊島」になる可能性は十分にあると思います。

床桜英二…「全員の力であなんの宝を磨き上げてそれを次の世代につなげていく」
県の方でも、「こくしま生物多様性センター」を作って、生物多様性と地方創生を絡ませていこうとしています。このように生物多様性をしっかりと認識する方に伊島に来ていただき、伊島から生物多様性の重要性を発信してもらいたいものです。

普通の地方創生計画は5年程度なのですが、もっと長く、これからの阿南市の未来を、全員の力で『あなんの宝』を磨き上げて、次の世代につなげていきたいと思います。